順天堂医院ニュース 2014
NO.47

平成26年度を迎えて　～院長就任あいさつ～

院長　代田　浩之

このたび、４月１日から院長に就任いたしました。順天堂は175周年を迎え、新病棟（Ｂ棟）も第Ｉ期工事が落成して新しいスタートを切りました。この新病棟は避難誘導用エレベーターを備えた我が国で初めての病棟です。今後、２号館および３号館の解体とＢ棟Ⅱ期工事、Ｃ棟の建築を進める予定です。

私たち順天堂医院では最先端の医療を患者さんの立場に立って、安全かつ快適な環境で提供することを最大の使命としています。そのために、先進的な病院機能を充実させるとともに、高い専門性を持った各診療科の医師が全てのメディカルスタッフとともに一丸となって診療に当たっています。

学是である“仁”を合言葉に、心のこもった医療を提供して行きますので、よろしくお願いします。

副院長就任のご挨拶

昨年に引き続いて順天堂医院副院長を務めさせていただくことになりました。よろしくお願い申し上げます。私の主な担当業務は、中央診療部門である臨床検査部と輸血室の責任者として、診療に欠かせない患者さんの検査（血液検査や生理機能検査など）を正確かつ迅速に行うこと、および安全な輸血療法を提供することです。また、病院清掃や資材供給などの業務委託部門を監督し、アメニティーを含め病院全体の機能に目を配ることも私の担当です。入院される患者さんが快適な療養生活を送っていただけるように、また、外来へお越しいただく患者さんを出来るだけお待たせすることがないように、職員が一丸となって努力してまいりたいと存じます。何かお気づきの点がございましたら、遠慮なくお申し付けください。どうぞよろしくお願いいたします。

副院長
大坂　顯通

４月から代田院長のもとで副院長を務める心臓血管外科の天野篤です。順天堂医院はその長い歴史から全国の患者さんが訪れますが、その多くは東京を含む関東一円の方々です。つまり、地域貢献の責務を他の特定機能病院以上に担うということから、しっかりと皆さまのご期待に応え、ご満足いただけるような医療を提供していくように努力します。一方で、３月には新病棟もオープンして、今後も継続的に病院機能が向上し、より高度な医療に対応可能な施設として成長し続けます。患者さんの安全を守り、検証と根拠に基づいた医療を第一に考えて、成熟した医療を各診療科から発信できるように職員一丸となって「不断前進」を心がけていきます。

副院長
天野　篤

４月から順天堂医院副院長に就任いたしました呼吸器内科の高橋和久です。本年度から代田浩之新院長のもと新しい診療体制をスタートいたします。順天堂医院は以前から、すべての診療科において、患者さん中心の医療にあたっておりますが、今年度は新病棟も完成し、心機一転、順天堂の学是「仁」の精神を周知徹底し、安全で高度、かつ心のこもった最新医療を提供してまいる所存です。以前に担当していた順天堂医院の医療連携室室長、医療連携委員長の経験を生かし、皆さまに「来て良かった」と思える病院、「自分が病気になった時に診断・治療を受けたい病院」を目指して全職員が一丸となって精進いたします。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

副院長
高橋　和久

新任教授紹介

麻酔科・ペインクリニック

麻酔科･ペインクリニック
角倉　弘行

平成 26 年1月1日付けで麻酔科学・ペインクリニック講座の教授に就任いたしました。私は無痛分娩や帝王切開など妊婦さんの麻酔（産科麻酔）を専門にしております。前任地の国立成育医療研究センターでは、経膣分娩の70%以上の妊婦さんに硬膜外麻酔による無痛分娩を提供しておりました。諸外国では一般的に行われている無痛分娩ですが、日本での普及率は低く未だに多くの女性が痛みを感じながら出産されているのが現状です。しかし、日本でも無痛分娩を希望する女性は着実に増えています。今後は、順天堂医院において 24 時間いつでも、安全で快適な無痛分娩を提供できる体制を構築していきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

腫瘍内科開設のご案内

腫瘍内科　加藤　俊介

教授
加藤　俊介

平成 25 年 12 月 10 日付で腫瘍内科教授に就任いたしました加藤俊介です。

順天堂医院の腫瘍内科は平成 26 年1月に創設されたばかりの新しい診療科です。

がんの治療は、主に外科治療・放射線治療・内科的治療（抗がん剤などの薬物療法、症状をとる緩和治療）の３本柱からなります。患者さんの病気の状況に応じて、選択すべき治療方法は変わってきます。また十分な治療成績を得るためには、必要に応じてこれら治療を組み合わせて行うこと（集学的治療）も必要です。

この中で主に薬物療法を担当して治療を行う診療科が腫瘍内科になります。近年新しい薬が次々と登場し、薬物療法の治療成績も向上してきています。しかしそれとともに副作用も多様化し、時には重大な副作用が出現することもあります。腫瘍内科は薬物療法の専門科として、最大限の治療効果と副作用の軽減に十分配慮しながら患者さんへの治療を進めていきます。それと同時に、各臓器担当診療科や放射線科、緩和ケアセンター、メディカルスタッフと連携して適切な治療の提供を行ってまいります。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

新病棟完成のお知らせ

2011年4月から建設を進めてまいりました新病棟Ⅰ期工事（B棟高層棟）が昨年末、無事竣工いたしました。

新病棟は、２号館および３号館の病室、その他の診療機能が全て移転した後、３月中旬にフル稼働いたしました。

新病棟の特色は、耐震、免震、制振性に富んだ堅牢な建物（100年建築）であること、東京大学と早稲田大学との共同研究により次世代の医療環境に対応した最先端のエコホスピタルを実現したこと、また、国内の建築環境評価システム（CASBB）の最高Ｓランクを取得すると共に米国の建築環境評価基準（LEED）のゴールド認証を国内の病院としては初めて取得すること、などとなっています。

さらに、東京消防庁が高層階の災害時の避難に非常用のエレベーターの利用を認めた新基準適用の第一号となる建物で、十分な費用をかけて患者さんやスタッフが安全に避難できるための耐火避難エリアや加圧排煙設備などの整備を行っています。

病棟の構成としましては、１階が救急・プライマリケアセンター、２階が放射線部、３階が内視鏡、歯科口腔外科、４階が検査、５階、６階が手術部門、７階が資材供給部門、８階がリハビリ、健康スポーツ室、９階が透析、血漿交換部門、10階～20階が病棟となっております。

引き続き、２号館を解体した後、新病棟のⅡ期工事の建設に着手いたします。同時に、３号館についても解体し、その跡地にC棟を建設いたします。

今しばらくは病棟の整備が続きますが、安全、安心、快適な医療環境をご提供し、さまざまな医療ニーズに応えるため、本学の理念である「不断前進」のもとに尽力してまいります。

ご理解・ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

センチネルリンパ節論に基づく口腔・咽頭がん手術

耳鼻咽喉・頭頸科　大峡　慎一

教授
池田　勝久

助教
大峡　慎一

口腔・咽頭がんは頸部リンパ節に転移を起こします。転移の有無はがんの治癒を決定する重要な因子です。非常に小さな転移があったとしても画像ではわからないので、がんの大きさや性状から転移が予測される場合は、頸部リンパ節郭清が行われています。しかし、手術後の病理検査で転移がない場合や術後合併症の可能性もあるため、頸部リンパ節郭清の必要性を適切に判断できるようにすることが課題です。そこで、がんがリンパの流れにのって最初に行き着くと考えられるリンパ節（センチネルリンパ節）を見出して調べ、転移があれば頸部リンパ節郭清を行うというものが「センチネルリンパ節理論に基づく口腔・咽頭がん手術」です。現在国内で臨床研究が行われており、順天堂大学もその臨床研究に参加し、積極的に適応しております。患者さんへの侵襲を最小限にしながら、治療成績が向上することが期待されています。

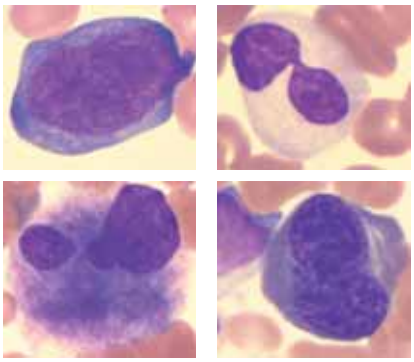
骨髄異形成症候群に対する新規治療法

血液内科　原田　浩徳

教授
小松　則夫

准教授
原田　浩徳

骨髄異形成症候群（MDS）は高齢者に多い血液疾患で、血液細胞の質・数の異常による貧血・出血・感染症にかかりやすいといった症状と、白血病への移行が特徴です。数年前までは輸血するしかない難治性疾患でしたが、新規治療薬によって治療成績が改善しています。レナリドミド（レブラミド®）は内服薬で、貧血が主体のMDS病型に非常に効果的です。注射薬のアザシチジン（ビダーザ®）は白血病に移行しやすいタイプのMDSに有効で、病気の進行を抑えて生存期間を延長する作用があります。また、繰り返し輸血を受ける場合には、過剰な鉄を除去するデフェラシロクス（エクジェイド®）を内服します。MDSには様々な種類があり、全てのMDS患者さんに同等の治療効果がある訳ではありません。詳細な検査・正確な診断により有効な治療法を選ぶ必要があります。さらに臨床治験中の新規薬剤もあります。詳細についてはご相談ください。



図：MDS患者にみられる血液細胞の異常

看護部ニュース

小児看護専門看護師の活動紹介

平成21年に日本看護協会が認定する小児看護専門看護師の資格を取得しました。現在は小児科病棟に勤務し、所属病棟を拠点として入院から外来通院の小児に関する相談窓口となっております。小児看護専門看護師として、診療に関する看護援助だけではなく、子供の成長・発達に関することや、きょうだい・家族に関することなど、幅広い支援を行っています。また入院中には、退院後の生活に向けてご家庭で使用する医療物品や医療的ケアの相談、地域サービスとの連携などを支援します。安心してその子らしい生活を過ごせるよう、訪問看護ステーションの看護師や往診医、保健師と情報交換し調整を行うこともあります。

外来・入院の職員一同が協働し、チームで支援を行っておりますので、気軽にスタッフまでお声をかけてください。

1号館10階B病棟　東山　峰子

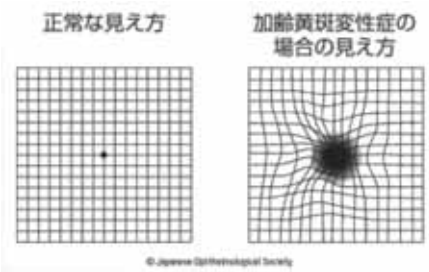
薬剤部ニュース

片目でゆがんで見えませんか？

加齢黄斑変性という病名をご存知でしょうか？加齢黄斑変性とは、モノを見るときに重要な働きをする黄斑という組織が、加齢とともにダメージを受けて変化し、視力の低下を引き起こす病気です。50歳以上の約1.2%にみられ、年を重ねるごとに多くなります。日本人では、男性に多いことが特徴です。

症状は、視野の中央がよく見えない、ゆがむ、暗く見える、などです。最初は片方の眼に起きて程度も軽いために、年のせいにして見過ごしていることも少なくありません。

加齢黄斑変性には「萎縮型」、「滲出型（しんしゅつ）」の２種類があります。萎縮型は黄斑の組織が加齢とともに萎縮する現象で、症状はゆっくりと進行し、急激に視力低下することはないため、治療は必要ありません。滲出型では、網膜のすぐ下に新しくもろい血管（新生血管）ができ、この血管から出た液体が黄斑の組織にダメージを与えて、視覚障害を引き起こします。治療法としては抗 VEGF 療法という新生血管を沈静化させる薬を硝子体内に注射する方法が一般的です。また、光に反応する薬剤を体内に注射し、それが新生血管に到達したときに弱いレーザーを照射して新生血管を破壊する「光線力学的療法」、新生血管をレーザーで焼く「光凝固法」などの新生血管を破壊することで黄斑へのダメージを食い止める外科的治療もあります。



発症のリスクを高める因子として喫煙、太陽光、抗酸化物質の摂取不足等があげられます。加齢黄斑変性から視力を守るカギは、早期発見です。異常を自分で見つけられるよう心がけましょう。

臨床検査部ニュース

微生物検査について

微生物検査は、感染が疑われる患者さんの尿や喀痰（かくたん）、糞便などから感染の原因菌を見つけ、どの抗菌薬が効くかを調べる検査です。主な検査は、染色標本を作り顕微鏡で細菌の有無を観察する塗抹検査、栄養豊富な試薬を使って細菌を育てる培養検査、発育した細菌の種類を決定する同定検査、治療に有効な抗菌薬を調べる薬剤感受性検査です。各検査は数時間から１日ほどかかるため、結果の報告まで数日を要します。

細菌は“生き物”なので、適切な採取・保存が必要です。患者さんご自身で尿や喀痰（かくたん）を採っていただく場合には、スタッフから説明いたしますのでご協力くださいますようお願いします。

塗抹検査

培養検査

当院の臨床検査部ホームページ

http://www.juntendo.ac.jp/hospital/support/rinsyo_kensabu/index.html

医療福祉相談室ニュース

平成 26 年４月から ペースメーカ（体内植え込み型除細動器を含む）や人工関節（人工骨頭を含む）を入れた方に対する身体障害者手帳の認定基準が変わりました

		平成 26 年3月まで	平成 26 年4月から
ペースメーカ等を入れた方（心臓機能障害）		一律１級に認定	１級、３級、４級のいずれかに認定 *1 *2
人工関節等を入れた方（肢体不自由）	股関節 膝関節	一律４級に認定	４級、５級、７級、非該当のいずれかに認定 *3
	足関節	一律５級に認定	５級、６級、７級、非該当のいずれかに認定 *3

*1 ペースメーカ等への依存度や日常生活活動の制限の程度に応じて認定（原則３年以内に再認定が必要）

*2 先天性疾患（18 歳未満で心疾患を発症した方）により体内に入れた方については、従来通り１級

*3 術後の経過の安定した時点での関節可動域等に応じて認定

〈経過措置〉今回の変更は４月１日以降に申請された方から適用されますが、３月末までに診断書・意見書が作成された方については、６月末までに申請すれば従来の基準で認定されます。

栄養部ニュース

栄養部の新しい取り組み

衛生・温度管理のもとで暖かい食事の提供

栄養部では、患者さんに衛生的で安全な食事を提供することをモットーに、B棟（新棟）では HACCP（ハシップ）に基づき、ニュークックチルと呼ばれる新システムでの給食を提供いたします。

HACCP とは英語の Hazard Analysis Critical Control Poit の頭文字をとった略称で、「危害分析重要管理点」と訳されています。危害とは、食品とともに口から入った時に、お腹をこわしたり熱を出したりする原因となるものをいい、これを科学的に分析して原材料から調理完成品までの衛生管理・温度管理を常時行いますので、より安全な食事の提供ができます。また、新システムでは加熱調理した料理を急速冷却しチルド保存します。食事は、再加熱カートで加熱後すぐに病棟にお届けするため、患者さんに、より温かい状態で提供することができます。

栄養部　小林　喜代恵（管理栄養士）

順天堂医院の今昔

江戸時代の順天堂

順天堂は 1838 年（天保9）に佐藤泰然が長崎留学から戻り、江戸の薬研堀（現東日本橋）に医学塾「和田塾」を開いたときからはじまる。それから 175 周年。2014 年4月に祝典が行われる。

江戸には杉田玄白の蘭学塾「天真楼」が始まって以来、有名な蘭学塾がいくつもあったが、「和田塾」は外科塾として名をあげた。その後、泰然は和田塾を女婿林洞海に任せて、自らは佐倉に移るが、林洞海は将軍家定が危篤になったとき町医から奥医師に抜擢された名医であった。

（図）

佐倉に移った泰然が開いた順天堂は外科塾として大いに名をあげ、医学生が全国各地から集まった。当時の外科の記録「外科実験」（図）が残るが、その中に嘉永4年（1851）に日本で最初の「小便閉膀胱穿孔術」を泰然が行った例がある。尿閉の患者に膀胱穿孔をすると、大激痛のあと尿が自然に出て治ったと記す。後はどうなっただろうか?

泰然の次男松本良順が他所で経験したテタヌス（破傷風）の記録もあった。患者は 40 歳の武士。良順の他に有名な医師も呼ばれたが、良順だけが患者の後弓反張（背中が反り返る）をみてテタヌスと診断した。しかし、幕府の医師良順は治療していない。当時、幕府の奥医師は漢方以外の、つまり西洋医学の治療をすることが禁じられていたからだった。

順天堂大学医学部医史学研究室
特任教授　酒井シヅ

順天堂大学医学部附属順天堂医院
〒113-8431　文京区本郷3-1-3
TEL：03-3813-3111(代表)
編集　病院広報委員会
発行　医療サービス支援センター
地域医療連携室（平成26年4月発行）

ホームページ
http://www.juntendo.ac.jp/hospital/

順天堂医院　検索